＜吉村元男の「景」と「いのちの詩」＞出版記念

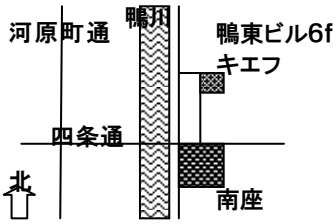
吉村元男「瀧をつくる」作品展前日フォーラムのご案内

ご案内
吉村元男が「吉村元男の「景」と「いのちの詩」を出版しました。数十年の年月を経た氏の4つの庭園・公園の代表作が、詩と写真によって紹介されています。この風景を中嶋康喜氏による朗読で楽しんでいただきたく出版記念フォーラムを企画しました。この機に皆様のご参加と交流を重ねたい所存です。

○出版記念フォーラム企画世話人
加藤幹雄、高石秀雄、中橋文夫
中村務、能田静枝、日爪嘉男、北条誠、村田辰雄、山崎泰孝、和田野光彦

進行；司会
1）講話；吉村元男「滝の文明・噴水の文明」
2）中嶋康喜氏（劇団ひまわり）による三つの詩の朗読（和英文）
○都市の始まりの水
○逆流の滝」
○森と人間と水の大蛇
3）昼食・懇談
4）交流

中嶋康喜氏
（劇団ひまわり所属）。



日時；平成25年9月16日（月）
正午から午後3時
（午前11時30分開場）
場所；ロシアレストラン「キエフ」
京都市東山区縄手通四条上る鴨東ビル6F
電話；075－525－0860
会費；一人3500円（本代＋ランチ1ドリンク付き含む）ご参加は、下記に申し込みお願いします

翌日平成25年9月17日（火）から9月22日（日）まで、午前10時から午後6時。ギャリエヤマシタ(電話075-231-6505)にて、「吉村元男滝をつくる」の作品展を開催します。

都市の始まりの水（本文30頁）

都市の始まりは
空中パラダイスから噴き出す
水ものがたり
都市の頂きに蓄えられた雨水が
空中の楽園を潤す
メタリックな噴出口から
地のいのちにむけて、
頂きの水が飛び出す

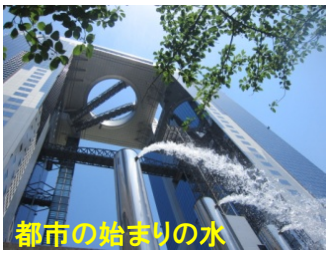
湾曲した九本の水しぶきが
地上の木々に降り注ぐ
風がまき上がり、梢をゆらし、
森は吠える
天とメタリックな楽園と地が
雨水でつながり、
都市に力を蘇えらせる

逆流の滝（本文44頁）

ある日、突然に滝が岩をさかのぼる
水が力を得て、引力に逆らったのだ
輝く太陽、明るさを増す空
地上のぬくもり、土の中の生き物
木々のざわめき
そういったいっさいのうごめきが
水の落下の方向を転換させたのだ
逆流滝は、いのちの増幅現象だ

森と人間と水の大蛇（本文56頁）

森の中から、水が流れ下る
その水流は、水の大蛇だ
水の大蛇は、森を出てのたうちまわる
あるときは、石ころのはらわたを
あからさまにして、心地よく、眠る
森と水の大蛇は、同床異夢なのか
いや、そこに、人間が引き寄せられる
そうすると、森と人間と水の大蛇が
ひとつになる


都市の始まりの水

逆流の滝

森と人間と水の大蛇

産経新聞関西新刊案内 2013 年 8 月 9 日（金）

『吉村元男の「景」と「いのちの詩」』日本人が失った「空地」の概念

豊かな木々が生い茂る万博記念公園（大阪府吹田市）、新梅田シティ（大阪市北区）のビルを包み込む滝や川に森…。いずれも京都市左京区在住の風景造園家、吉村元男さんの手で設計された。建築物は建っていないが、ただの空き地ではない。吉村さんはこの空間を「空地（くうち）」と呼ぶ。カラー写真とともに吉村さん作の詩で空地を紹介する『吉村元男の「景」と「いのちの詩」』が刊行された。「現代の都会では土地の上に建築物を建てることが当たり前のようになってしまったが、実は空地こそが人の精神を豊かにしている。近代化を遂げるなかで日本人はこの概念を失ってしまった」と吉村さんは語る。「日本にはもともと森に囲まれた何もない空地の文化があった。あったのは森に囲まれたただの空地だった。そこに神が降臨し、人はそこで神と出会った。神が降臨する森の空地につながる神への道があった。参道である…」吉村さんはこの空地の概念を「万博記念公園自然文化園」や新梅田シティの「中自然の森・公園緑地」に盛り込み設計した。 戸津井康之（京都通信社　1470円）

出版記念フォーラム参加申込書　下記の申し込み書にご記入の上、お申込みください。FAX075－781－4418

参加申し込み	氏名	住所	連絡先
「吉村元男の「景」と「いのちの詩」の出版記念フォーラムに参加します。			

電話又はメールでのお申し込み；京都市左京区北白川下池田町67吉村元男電話075－781－4418　メールecohabi@gaiaction.com